

川柳の雑誌

★ 兵士は戦線に！ 我等は銃後に！！ (國民精神動員)

麻生路郎 ★ 編輯



陸

13/9

176

第五十卷 第九號
每月十五日發行

川柳雜誌社發行

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和十三年九月十五日發行
第十五卷第九號(每月十五日發行)



菊正宗

株式会社 本嘉納商店



江戸あ
え祝
とんかつ
おんべ
なべ

北
さくらば
てん
神楽
天
舞



のた
めに

妊娠としての大切な責任
はカルシウムを補給し
て諸病を防ぎ、子宮の收
縮を容易ならしめ「安産」
へ導くことにあります。

榎林醫學博士 推奨
片瀬醫學博士 監査

片瀬醫學博士
「安産のために」冊子呈上



ワダカルシウム錠

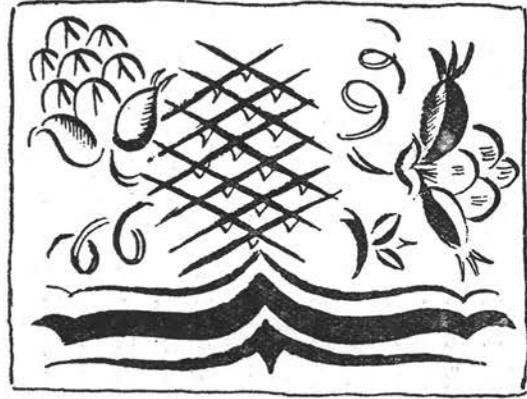
大阪道修町 和田卯助商店



清酒
白鶴

川柳雜誌

第五十卷 第九號



川柳雜誌 九月號 目次

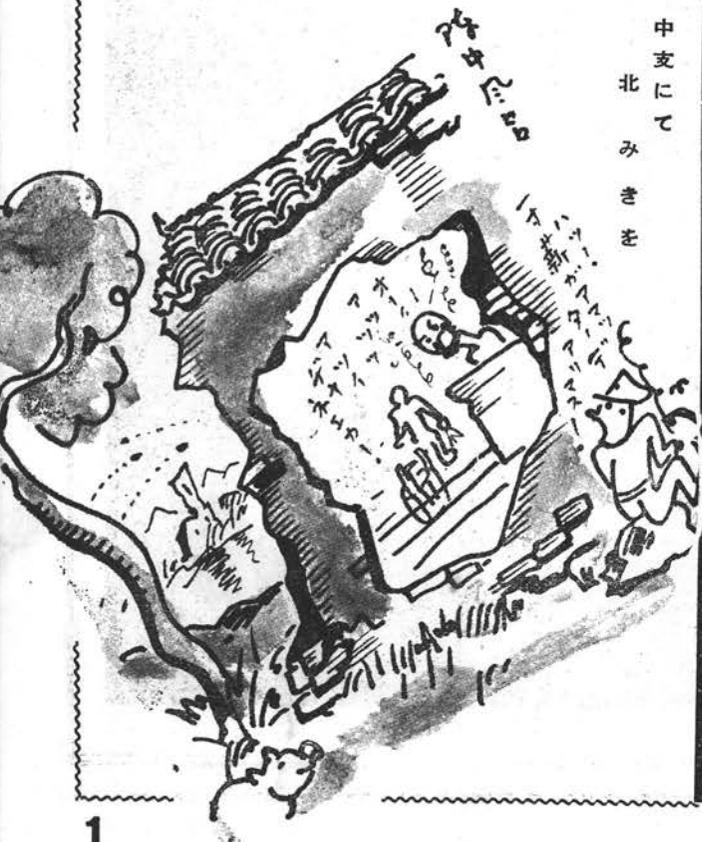
表紙……柴谷宰二郎

川柳評釋	都會風景……………麻生路郎(四)	不朽洞句抄……………麻生路郎(一)
詩人複眼……………高鷺亞鈍(六)	近作柳樽……………麻生路郎選(八)	川柳塔……………諸家(一〇)
バット異變其他……………不朽洞主人(四)	此際……………長野文庫(三)	一山路……………麻生葭乃選(六)
水族館……………麻生葭乃(三)	武玉川三篇研究(三)……………梅本秋の屋(三)	集海……………須崎豆秋選(六)
陣中風呂……………北みきを(一)	川柳解題と例句……………路郎編(三)	各地柳壇……………(四)
稻垣正穂氏を訪ふ……………青屋仲(三)	中支にて北みきを……………(三)	後記(表三)……………社關係の人々(表三)
		川・協の頁……………(一三)
		久良古稀の慶びに祝賀記念品贈呈に就て……………(一三)
		柳界展望……………(一〇)
		川柳案内……………(二)

不朽洞句抄

麻生路郎

彼も彼も
漢口らしい九月なり
その母も
丸刈にして待てごいふ
注射して
北支の夢を見るもよし





武玉川三編研究

(二)

梅 本 秋 の 屋
森 子 省 二 魚

て、決して螢の巢でもなく、小虫も螢の幼虫ではない。

東 魚 炎天の下に、僅に晝顔の一點のうらほひを見出した心持ちであらう。

省 二 二なか／＼細いみつけどころ。

(336) 茶碗ではあたりの濡る硯はこ

省 二 茶碗の水を覗へ注いだ爲に、外がぬれる。よくやる経験だ。

秋の屋 平板ではあるが、捨てた句でもない。

東 魚 實感から來てゐるので、句にそれ丈の強味があるのだと思ふ。

(837) 夢に見るつもりて晝も文まくら

省 二 晝寝にも、戀文を枕の下にしひて眠り、夢にまでみたいといふ願望。

秋の屋 夢のみを頼みにする、はかない戀である。

東 魚 逢瀬をたゞれてゐる、息子などであらう。

(338) 灯に向ふ女の顔へ夏の蟲

省 二 色々な虫が飛込むでくる。灯に對する若き女の心にも……。

秋の屋 此の女の胸にも、火を燃すのであらう。

東 魚 夏の虫が戀を暗示するやうに、女の顔へとぶ。寧ろ虫に心をよせて對手の女を戀する、心持ちではなからうか。

秋の屋 燈下に物思ひをしてゐる女の顔へ、灯取虫が飛こむで來るので、女は戀に胸を焦し、虫は灯に身を焦すといふのである。

(339) 涙まかつく供の乗もの

秋の屋 如何なる場合の供である歟。無理に結婚させられる花嫁の駕籠歟。

東 魚 供に立つたものが泣いてゐると取れる。葬儀では徒歩であらうから、どうも場合が想像出來ぬ。

省 二 ？

(340) 人形遣ひの惚ところなき

秋の屋 昔の人形遣は、總て黒衣を着たものらしいが、其顔が隠れて見えぬ故は、何程上手に人形を遣つても、女などに惚れられる事は無いであらう。

東 魚 惚れ處がないと云ふのが諧謔であり、可笑味を誘はれる。

省 二 黒ノ坊ではより處が無いわけだ——人形遣の名人が澤山出て、水中早替を勤めたのなどは、顔は出してゐたものと察するが。

(341) 貰ふたを扇で分るかきつはた

秋の屋 他より到來の燕子花を、擇り分るといふのであるが、扇を使用するので上品に聞える。

東 魚 扇にのせて差出すのであらう。其處に風情がある。

省 二 今では、かゝる扇の使用方が、段々忘れかけて居る。

(331) よく似た顔に遠いさゝやき

秋の屋 向通るは清十郎じやないか、あの菅笠を被つた顔つきが、能く似てゐるなど、女達がさゝやくのである。

東 魚 さゝやくのは女達であると、私も思ふ。

省 二 女である方が、句をいかす。

(332) 光陰の中にも八日十二日

秋の屋 八日は十二月八日の事始。「十二日」は七月十二日の草市であらうと思ふ。その日になつて、光陰の迅速なるを感ずるのである。

東 魚 前説で句意は、充分のみ込める。

省 二 考へさせられた句の一つだ。

(333) 費な顔の見へる九重

秋の屋 九重は大内のことで、御所には不必要な、官人や官女などの冗員がある、と云ふ句と思ふ。

東 魚 「費へな顔」と云ふ、擲論が面白い。其上官人の衣裳などからしても、費へと考へられる。

省 二 冗費な顔、即ち冗員。

(334) 鼓も下手に狸老けり

省 二 その下手な腹鼓でもよい。私は一生に一度でも聞いてみたい。雲萍雜誌に二話があつて、月のさやけさに、狸が集つて腹を打つ。その音遙に響く。宿してくれた寺僧の云ふに、此寺に九年住むが、三年目の秋から、人々が音を聞くといふに、その處を尋ねてみたら、只狸の棲める穴があつたと。「人すまで鐘も音せぬ古寺に、狸のみこそ鼓うちけり」(寂蓮)

秋の屋 人間の鼓打にも、下手で一生を終る者がある。狸の腹鼓といふ俗説の起源は、慈鎮の和歌であつて、小鼓や腹鼓ではなく、山寺の時の太鼓である。

東 魚 前句の關係で、こんな句が出來たのであらうが、どうも浅い句だと思ふ。

(335) 此日さかりに晝かほの淡

秋の屋 水邊に生ずる雜草の根際に、白泡の塊をみる事があるから、それを詠んだ句であらう。此の泡の塊の中には、蝨の形をした小虫が棲息してゐる故、東京人はこれを蝨の巢と稱するけれども、それは誤りであつ

て、決して螢の巢でもなく、小虫も螢の幼虫ではない。

東 魚 炎天の下に、僅に晝顔の一點のうらほひを見出した心持ちであらう。

省 二 二なか／＼細いみつけどころ。

(336) 茶碗ではあたりの濡る硯はこ

省 二 茶碗の水を覗へ注いだ爲に、外がぬれる。よくやる経験だ。

秋の屋 平板ではあるが、捨てた句でもない。

東 魚 實感から來てゐるので、句にそれ丈の強味があるのだと思ふ。

(837) 夢に見るつもりて晝も文まくら

省 二 晝寝にも、戀文を枕の下にしひて眠り、夢にまでみたいといふ願望。

(342) はたかな人によける清水

秋の屋 京都の清水寺へ、寒中に裸参りをする人が有るので、他の者がこれを見て、道の傍に除るといふの賦。

東 魚 狂人を瀧にうたせでもする場合かと思ふ。傍の人が不気味によけるのであらうか。

省 二 裸「清水」から、私も瀧を聯想してしまつたが、狂人とまでは思はず、信心からうたれる人或はうたれて出てきた人を、除けるのかと考へた。

(343) 春の夜を少し買はや寶ふね

省 二 枕の下に敷いて吉夢をまつ心樂しみを、「少し」で現はして居ると思ふ。

秋の屋 春宵一刻値千金の意を含むのであると思はれる。

東 魚 少「と」云ふところに、富貴榮達に別に焦慮するでもない、平和な境地に満足してゐる気分が出てゐる。

(344) 暈禮の棒をひくのも氣の轉し

秋の屋 棒をひく「の」意が不明。杖のことではないらしい。

東 魚 同感。棒がわからない。

省 二 棒を引く「といふ言葉は、日常いくらも用ひて居るが、句に添はぬ。棒引紋付ではなし、どうも判明せぬ。やはり「杖」の意なのではなからうか。

(345) 腹立ツて着る袴か揃はず

省 二 立腹は一種の狂人状態に入るのだから、気分がいら／＼して、袴も亦袴も不揃ひなのは當然。私にも體驗がある。

秋の屋 句の調子にも弛みが無くて、如何にも立腹してゐるやうで面白い。

東 魚 句調に弛みはないが、修辭が説明的のやうに思ふ。見つけどころは面白い。

(346) まだ寝ぬ伏見つゞく賣物

秋の屋 伏見は三十石船の發着所であるから、夜がふけても商店では寝ずに、種々の物を賣つてゐるのである。

東 魚 句意は前説の如く思はれるが、「つゞく賣物」とは、言ひ表はし方が不熟ではなからうか。

省 二 夜遅くまで賣物店が軒を列べて居る光景。

(347) 世のまこと忽くろむ善の網

省 二 善の網に就ては「まこと」は眞信の中に善の網で陳べた。「まこと」は眞信。開帳場の一情景。參詣人のため善の網も黒くなる。

秋の屋 句意は判明してゐるけれども、理窟體で面白くないと思ふ。

東 魚 黒くなるといふ事は、得て悪い方に考へられるが、これは又、善の網の黒くなるのは人の信心、まことの心からであると、アイロニカルな處を覗つたのだらうが、聊か狂句的ならひ方である。

(348) 銀閣寺計見殘す出養生

秋の屋 出養生は、轉地療養であるが、まだ半病人である故、洛中の名所古蹟は、大方見物したけれども、洛東の銀閣寺ばかりは、遠方だから見殘したといふのである。

東 魚 一寸一つ飛び離れてゐるから、黒谷若王子などもありはするが、病後には廻り残すのも、尤もと思はれる。

省 二 今日では道路も改修されたであらうが、私が京に住むてゐた時でも、金閣寺と銀閣寺では、後者を見残すであらう程、不便であつた。

(349) 松風ともに質に取る山

省 二 質にとる山には松が生えて居る。

松籟が氣に入つた風流氣はたのもし。「鶴下りて質にとる山も面白し」と同工にて面白し。秋の屋 拜金宗の信者にも、些の風流心はある。

東 魚 質にとるといふ俗な事件に對して「松風ごと」と第三者から風流化して、やれ／＼と嘆じた心持ちであらう。

(350) 遠くへ智慧を廻す錢別

秋の屋 未だ知らぬ他國へ往くと、水中りや食中りも有るから、錢別には藥が宜からうなどと、配慮するであらう。

東 魚 ありきたりのものでは駄目だと、色々心を配るので、「遠くへ智慧」は中々巧みな言ひ方である。

省 二 遠き慮をしてやる。古句には「智慧」なる言葉を用ひたものは、かなりあるが、理窟に陥りさうで、此句などそんな弊はない面白い。

(351) 仲人を二階の上ではつて居る

省 二 仲人の報告を二階で心待ちの娘。二階の上でと、強めたところよろし。

秋の屋 娘と限定せずともよからう。

東 魚 現はし方が生硬だと思ふが如何。

(352) 中間一人たよりない戀

秋の屋 戀の取持(媒妁)を中間に頼むだけども、夫れ一人では覺束ない、もう一人腰元にも頼みたい、といふ意であらう。

東 魚 戀する人は若い男で、武骨な中間の媒ちでは、全く心もとない。

省 二 前二解に盡きる。中間一人では話が込入つた場合、ぶちこはしになる恐れなしとしないから。

(353) 振袖に稻妻よけてやり過し

省 二 やり過しは、稻妻を振袖でよけて、やり過すのか。或は後から來る人をやり

過すのか。後者の場合なら複雑味はあるが、それには前句でも關係してこねばなるまい。

秋の屋 電光の一閃する瞬間に、「オ、こは」など云ひ乍ら、振袖を顔に當るので、少婦の嬌態がよく表現されて居り、坐五の「やり過し」も面白い。

東 魚 やり過すのは、矢張り稻妻をやり過す意であらう。

(354) 癩疽を病んで起請こはかる

省 二 主として指(時には掌)の一部が化膿し、非常に痛む患ひである。その炎症疼痛の體驗から——手術をするので——指を切つての起請が、おそろしくなるのだ。(老妻も患つて半歳に數回切開した。民間療法が松屋筆記其他に出て居る。)

秋の屋 癩疽は、男子よりも女子の多く罹るものであるが、坐五の「こはかる」は女子の口吻である。

東 魚 起請となれば命がけの戀だから、癩疽位なんでもなさうだが、そこが人情で戀に命は投出して、癩疽には憫みたくないのである。

武玉川(前號)正誤	頁
一段	行
誤	正
八 一	一筆魔 庵
八 二	二筆 沾
八 三	三筆 沾
八 四	三〇 其處 外

風流腰掛料理

福

文又吳いじさ

心話いふこい



麻生路郎

聞きもせぬ垢教へる女給なり

湧 三

聞きもせぬのに、「あたしは××アパートにゐるのよ」ミおツしやる。

「彼氏ミかい」ミ云へば

「たんごおツしやいよ」ミ睨らむ。

この睨みこそは相當の魅力を持つ。

五階までカレーライスを喰べに行き

青 一路

「さや」ミエレヴエーターから吐き出される一群は食堂へ食堂へミいそぐ。そこでは、まるでただで貰つてゐるやうな光景が展開されてゐる。流石に都會だ。

世話になるならんで母娘もめてゐる

三 笑

娘にしてみれば役者のやうなノツペリミした男がいゝのだし、母親にしてみれば胡麻塩頭でもタンマリミ貯めてゐる旦那の世話になつた方が安心だミいふのだらう。さつちにしたつて愛を忘れた結合に幸福のあらう筈がない。こんなこゝは考へるまでもあるまい。

母校からの便りきまつて寄附のこゝ

洗 塵

又かミ思ふのが母校の寄附だ。××先生が病氣でお辭めにならうミ在職三十年であらうミ、講堂が改築されようミ僕の知つたこゝではない。それよりもこちらが貰ひたい位なものだ。

正月も日銀支店硬い顔

牧 人

それが支店であらうミ日本銀行は建物を見ただけ

でもズシリミ嚴めしい。四角張つてビクミもせぬミころは何んミ云つても銀行の銀行だ。親方は日の丸だからな。これは擬人法の句。

謹嚴の彼も人の子プラスなり

筑 川

ひそかに街の泌尿科のドアを排して出た彼氏へ、出合ひがしちに肩を叩いてニヤリミしたアミー。「君も病氣かい」に彼氏黙して語らず。

人斬る程に磨いて肉屋は百目きり

宵 明

ギョロリミ光つた肉屋の眼、磨きすましたる肉切り庖丁、それで人を斬るミころか、タツタ百目の肉を切つたのである。何んミなくユーモラスな句だ。

巡查今日ネクタイで来て無心云ひ

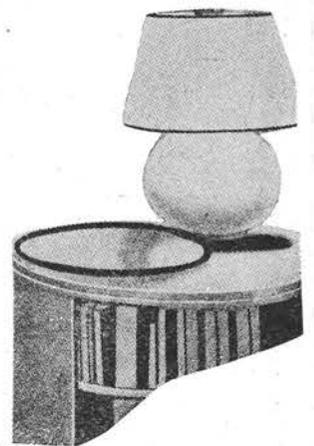
一 芳

幾ら巡查でも制服ばかりでは暮らされない。出産だ轉動だミ云へば交際費も要る。彼等の都會生活は決して樂ではない。街の外づれで、平家でも借りてゐれば未だ上の字だ。多くは二階借りだ。多くは獨身だ。ウツカリすれば鹹の字だ。

エスカレーター塑像の如く並びたり

青 米

エスカレーターは都會の華だ。すました姿でボカリミ浮き上つて来るさまには確に一種のユーモアがある。ノータイのサラリマン、花を捧げたお嬢さん、風呂敷包の女中さん、田舎へかへる百姓さん、トランク抱へた旅鳥等等。



トツバ

他其變異

人主洞朽不

私たちが、戦線の記事をむさぼるやうにして讀むのと同じで戦線の人たちが、一枚の新聞紙を引つ張り合つて讀む心は、銃後の生活異變を知りたがつてるのに違ひない。それが一年餘も異境にあれば殊に甚しいのではないかと思ふ。私の書くのは、ホンの銃後の一部分、それも私の身邊雜記に過ぎぬのであるから、銃後の人たちには珍らしくもないが、戦線にある柳友への手紙だとすれば容されるだらう。

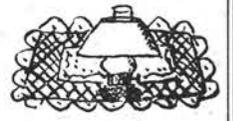
バツト異變

君も知つてるやうに、僕はバツトを一日に六ツから八ツ喫つてゐるが、しまつをしろ貯金をしろミいふ掛聲を聞くミ贅澤をしてゐない僕はバツトでも少し減らして見るより仕方がない。大體僕のバツトは自分の仕事ミ正比例して能率があがるのでコレを減らす事は凡そ意味のない事なのだ。傍から見れば無駄な様にも見へるので、一日に四箇位に減らそうミいふ決心をして實行にかかつたが、なか／＼實現が困難で、今では四箇乃至六箇位の間を往來してゐる。それでも幾らか減つたが貯金帳へはちつとも響かない。僕の貯金帳はよほぎ貯金にかけ

ては鈍感らしい。そのくせ僕の貯金帳は町の郵便局長に奇異の感を懐かせてゐる天晴れ名譽の貯金帳だ。なんしろ通帳番號の上に「勤」の一字があるんだからな。君も知つてる通り僕は近眼で兵役は丙種だ。しかしこれでも世界戦争に従軍したこゝになつてゐるので、その時の御褒美が忘れ得ぬ「勤」の貯金帳だ。少し自慢話になりそうだがこの話は止して、元のバツトのこゝに及ぼう。近ごろのバツトは吸ひ口が無くなつたそれだけ函の幅が狭くなつたよ。これは國策にそつて紙の節約なんだ。僕の懐ろでは、これつばかしの紙を節約した

書け一奇に 全国便箋

こゝろでミ思うが、これが大したしまつになるらしい。いつそ函を止めにして十本以上の數賣りにして、銘々が煙草ケースを持つて買ひに行くやうにしたらさんなものをちやうミ思ふ。昔へ戻つて腰へ貰入



詩人複眼 (5)

高 鷲 亞 鈍

象牙の塔

今から七、八年程以前南海沿線の岸之里驛近くに、「象牙の塔」といふ小さな、しかし風變りな喫茶寮があつた。その主人は獨身の若き彫刻家であり、白哲の額には長髪が垂れ下り、ホヘミアンネクタイが咽喉元に大きく結ばれ、コールドの袴下をはいて、そしてとても美味しいコーヒーを沸かして自身で卓子まで持つてきて呉れたものである。このサント・ブーアばりの「象牙の塔」に集ふ常連達が、又その頃の若き詩人であり、畫家であり、音楽家達で、所謂、この茶寮は藝術家に限つて集ふたのであつた。それ故に、その茶寮には、ピカソや、キリコやアルキベンの畫集が据へられコクトオや、ジャコブや、ブレモン、アラゴン、スウボオからジイド、ヴァレレイ等のフランス新興の詩人や批評家や作家等の著作物が持ち寄られ又ドヴェキシイや、ヴェルレーンの詩やフランス・ジャムの詩曲をものしたシャルル・ポルト、最近の映画「オーケストラの少女」に出演したストコフスキー等のレコー

ドに耳傾けたりするのであつた彼らは若く朗かであり、そして天才を自稱してゐるが、決して有名な藝術家になれさうでなかつた。何故なら、もつとも新しい藝術は、もつとも新奇なそして非實用的な發明子のやうに民衆は跟いて來ないからである。しかし彼らにとつて、其處ことはどうでも良かったのだ。衆愚とか俗衆とかは、輕蔑す可きであつたから。若しこれらの連中の一人／＼を語ることが許されるなら、非常に興味もあり、且つ愉快でもあらう。だが、僕は讀者の一番縁故深い人をこの連中の中から擧げて置かなければならない。それは當時、この茶寮の近くに住つてゐられた麻生路郎師である。僕が師を最初に知つたのは、實にこの茶寮であつた。師は「僕は、あの若い連中の氣焔にあてられ、あゝいふ空氣に浸るのは非常に好きなん

でね」と後に述懐してゐられたが、まつたく、あの連中の中では親父とまではゆかなくとも、叔父さんなら似合ふ位の最年長者であり、既に藝術家として一格を備へる、たつた一人の存在であつた。川柳の大家は、こゝ

では理解のある叔父き位に見られて、そのまへで各自は好きな議論を闘はしたものである。師がこの茶寮の若き主人の良き後見であつたこと、酒浸しになつてゐるボードレエリアンO君の母校の先輩故に血肉以上の世話

道へ頭を叩きつけて不慮の死を遂げたことは、このグループにとつては現實の風に突き當ると



背を丸めて現實の風に飛び込まなければならなかつたのである。その後には勃る、五・一五事件、二・二六事件から、滿洲事變、支那事變といつた、この國の内々に勃る様々のアクシデントは彼らの超現實主義は全く無力であり、態のいい神經衰弱の症状でしかなかつたのだ。その中の一人は「地獄めぐり」をしてこよ

「う」と言つて、消息を斷つた。ワイルドの唯美派詩人某はルムペンになつてゐると聞く。或は一銀行員に收まつた者、勘當を許されて家に戻り、畫筆を抛けて家主に轉向した者もある。凡ては過去の夢を追つて現實に身を曝すか、夢を捨て、一介の世人に歸るかして、彼らは最早藝術を口にしないのである。



募 集 句

一路集

山 菫 乃 選

キヤンプ村出來て此の山人に知れ
山は呼ぶ海は招くこつる電車
山一つ越えた部落で水を乞ひ
ハイキング谷の深さへ石を投げ
山の湯の廊下わが影ふささびし
頂上の征服感に暫し居る
六甲のあんな處に灯が見える
故郷の山になつて汽車の窓
聞いて來た高山病に罹りかけ
峯近く歩調が揃ひ氣が揃ひ
八合と思ふあたりへ雲を書き
天人が舞ひおりそうなる山の暮れ
六根清淨ピツケルがついてゆく
介石は奥の山へミアベックし
哀れなるにんげんさもよ山の上
洗面器へうしろの山がうつるなり
旅の窓ふさ山肌の煙を見

比呂志 孝義 愁花 雪春 斗風 芳泉 悠起 風葉 春巢 水客 しとし 木公 水哉 春月 同花

海

豆 秋 選

遭難を恐れぬ若き山を戀ひ
二人來たこども喜しい山の上
手招から見る東山また晴れず
(五)山へ海へ鐵道省は大童
(五)グランドがあんなにせまい山の上
(五)雲の上で見る山みんな雲の上
(五)登山隊みんな若氣のいたりなり
(五)井の材料山を一つ越へ
(人)中腹に仁丹あり驛近し
(人)頂上はそこに見えて、はかざらず
(地)避暑の山夢に見たのさかけ離れ
(天)怒つたり踊つたりして峰續く
(軸)山の徑羊齒波調が合ふて來る

海を描く畫家へ裸の人だから
揺れてゐる海に季節の流れあり
闇の海生きんがための舟を出し
一人ゐる海の廣さへ立ちつくし
休日をもた海へ行く若きなり
聞き分けのない子のやうに海が荒れ
泳ぐでもなく惱ませる海水着
風鈴の向ふに見える夏の海
波高く鷗もヴィにしまりかね
砂に伏せば海のささやき聞こゆらし

同新 同石 文庫 葉光 春月 文庫 鴨路 市多 山尾 菫乃

春巢 半休 市多 雪春 悠起 芳泉 鴨路 葉留 水客

世を呪ふも嘯ふも、それ等は時代の逞ましい強權に會へば、敗慘の繰言に等しい。徒らに漠然たる空想に身を委せ、個人的な心の惱みや、とりとめもない悵鬱と悲哀にのみ耽つてゐたフランス浪漫主義者の中で、サン・ト・プーブの知友である詩人、アルフレッド・ドゥ・ヴィニイは彼の燃え上る内心の情熱は冷

川解題と例句

路郎編

(3) ビール

★ビールは大麥、水、ホップ、酵母等で醸造し、ドイツを始め世界各国で飲まれてゐる酒で、ドイツではハイギリスではBeerフランスではBiere我國では麥酒と書いてビールと訓んでゐる。俳句では夏の部に入れてゐるが愛飲家は冬の味覺を賞美してゐる。

★その醸造法は大麥を發芽させデアスターゼに富んだ麥芽を作つて乾燥後碎いて水を加へて糖化し、後ホップを加へて特有の香味を與へ、純粹酵母を加へて醸造させる。これを濾過して低温で貯藏すると後熟が行はれて生麥酒が出来る。これを壘に詰めて攝氏の六十三度から六十五度の温度で殺菌したものが市販の壘詰麥酒である。

微な理智の力をもつて抑へつけ象徴的形式を藉つて、獨特なベシミズムを表現した事を知つて置く可きだつた。彼等の没落は架空な主情の擴充の故である。客觀的な睿智の缺けてゐたことそれは何といつても救はれないことであつた。

燕麥、その他の穀類でも代用する。

★アルコールの含量は三乃至六パーセントである。

★次に麥酒及びその類似品をあげると(A)底面醸造麥酒シエックビールは後醸造を攝氏五度以下とし八日乃至十四日を経過して賣出すが、ラゲルビールは後醸造を零度以下として三箇月乃至四箇月間持續して壘詰にするもの、ピルセネル、ヴィンネル、ミュンヒェン、バヴァリアン、ボヘミアン等が之に屬する。我國の麥酒はピルセネルである。(B)上面醸造麥酒英國のエール、ポルター、スタウト、ベルギーのランビック、フアロー等がある。底面醸造の麥酒に比べてアルコール分が多くて五乃至八パーセント酸味が強い。(C)麥酒類似品シベリアにクアス、アビシニアにソワア及びブーザー、コーカサスにテルスカイアブラガ及びブサー、アフリカにタンブ、ボンベ

★大麥の一部又は全部を小麥、

出張先の海にもちよつこつかつこき童心を甦かへらせに土用波印度洋風を殺して陽は沈み海へ來て風があるな盲目の娘朝こ云ふ氣持ちも海は波の音或時はさ呆けたやうに海靜か海の陽を女怖れた冠りやう船長のふささびしきは海の月トネルを出るさしばらく海に沿ひ失戀の眼へ海原の青いここ

石鐵 葉光 不水 水 新水 文庫 同 春月 同 潮花 祭の灯さけてふたりは海へ出る (佳)お、海が見える(こ)呼んでゐる (佳)非常時へ體操をする海の朝 (佳)生活に出て行く朝の海は風ぎ (佳)水平線黒けむりだけ残つて居 (佳)濁水の川しも海が見えてゐる (人)海へ來て子供大きい聲を出し (地)偉大なる心海からひらけて來 (天)ダイビング綺麗な雲が流れたり (軸)キヤラメルを食べながら見る秋の海

イマ、チンベ、フツシユアラ、モルラ、オマルフ、支那にターサン等がある。

★麥酒は從來エチプト人によつて發明されたやうに云はれてゐるが、最近の研究では、それよりもズト古く、パピロニヤやアツシリア人が既に大麥を原料として立派な麥酒を醸造してゐたことが判つた。詰まり各國の麥酒はエチプトからひろがつたものではなく各民族でそれ々の麥酒を醸造したのであるといふ説が主張されてゐる。それはばかりでなく、久しい間、疑問とされてゐたホップの使用などももうその時代に麥酒の調味料として用ひられてゐたことが數々の石に刻まれた古代文字や彫刻によつて證明された。

★日本では何時頃から麥酒が醸造されたか詳しいことは判らないが幕末の蘭醫川本幸民がその鼻祖であると傳へられてゐる。近世名醫傳によると、川本氏は攝州三田の人で世々九鬼候に仕

へてその藩醫を勤めたのであるが、少時から理學に通じ「理學原始」「舍密讀本」「舍密直言」「化學初教」などその他理化學に多數の著述がある上に銀版光書までも自ら製作したといふ位であるから蘭書によつて麥酒を試醸したのも恐らく事實と見てよいであらう。氏は嘉永六年に幕府の通譯官に任せられ米國の水師提督ペリーと浦賀で屢々會談したこともあるので、その際の麥酒の味も知つたのであらうと思はれるが確たる資料は傳はつてゐない。然るに明治に入つてから間もなく横濱在住の米人、コブランド W. Copland とウエガンド W. Ward の兩人が山の手に通りで麥酒の醸造を開始した。醸造用水は山の手居留地の一部であつた天沼から得た。天沼の湧水は硬水で麥酒の醸造にはこの上もなく適してゐた。コブランドは Spring Valley Brewery なる名稱で事業を開始したが、その製品はバツアリアンビール、

或はラガービールと稱し別に Brewed and Bottled at the Spring Valley Brewery Copland と説明してゐる。麥酒のことをまだ魔法水と呼んでゐた當時の事であるから横濱市民が天沼製の麥酒を珍らしがつたのは云ふまでもない。横濱市史稿によると世に「天沼ビヤザケ」として近くの鐵砲場(今の大和町一帯)の英國訓練場に通ふ駐屯軍の將卒や横濱在留の外人にとつて實に無くてはならぬものの一つに數へられた云々とある通り随分好評を博したものでらしい。

最近まで市民に知られてゐた琵琶池もビヤ池から轉訛したものであると説く人さへある。通説に我國麥酒業の鼻祖として知られる甲府の野口正章氏は自ら明治五年に横濱在留の外人で自家用の麥酒を醸造する者を聘して一年有餘の傳習を受けたと語りまた當時野口方に雇はれてゐた横山助次郎氏も野口氏は明治五年の秋から麥酒の醸造を

計劃し横濱で天沼麥酒を經營したコブランドを招聘して翌六年に麥酒の醸造を開始してゐると語つてゐるからコブランドは恐らく明治五年以前に天沼麥酒を製造販賣したのであらう。ビールビール秋がきたとて秋が來たとて 對岸の灯が美しい生ビール 九官の晝寢アサヒビヤホール その奥が聞きとらなつてジョッキ言ふ 遠慮して吞めばビールがお茶に似て 大ジョッキ胃の容積を疑はれ ビールビール鼻が二つに見えはじめ 床の間のビールを減らす友が來る 首と首縛つて麥酒腹斗がつき 無印になつて冷てるビール香 進物の麥酒ドスンと下ろされ 月の輪



樽柳作近

選郎路生麻



名簿へ戦死ミ入れた赤さんほ 愛媛縣 伊豫郡 門田雨城
 聖戦の君へすまない虫の秋 同
 下駄を履く事も忠義の世さなりぬ 同
 かまびすしこ、は國婦の幹事室 同
 今事變實子四名の出征軍人を出したSさん夫婦 同
 次ぎくミお役に立てた共白髮 同
 仕送りの一つ一つへ母の愛 朝鮮 弘津慶一
 事務的な言葉で注文取つて行き 同
 團扇もう骨ばかりなり子澤山 同
 今日も又雨か寝轉ぶ寂しさよ 同
 あの空は軍需景氣の煙を吐き 大阪府 高師濱 米本貴志子
 非常時に蛙は蛙だけに鳴き 同
 蠅取つて子は國債を買ふミ云ふ 同
 口添へをした辭任状うらまれる 同
 小兒科の拂ひ赤字の月つゞく 尼崎 酒井斗風
 男の媚を見せられた日のさびし 同
 白秋の詩をおもひだす島の霧 同
 風鈴の下に子のない夫婦ゐる 兵庫 酒井美知夫
 行商が子のきりぎりす褒めて去に 同
 子の慾を満たす女房の五圓紙幣 同
 優男チエリーを仰へ街へ出る 下關 櫻川不水

橙よ太れよ海豚の子も太れ 同
 雷鳴を睨んでビールこほしたり 同
 鉢一つ二つころがり冬さなる 愛媛縣 大洲町 米澤曉明
 放蕩兒手塩にかけた子であつた 同
 一瞬も前から女荷を下し 同
 口笛ミ靴が合つてる歸り途 廣島縣 竹原町 谷本朱雀
 正札は吾に縁なき數字なり 同
 錦魚錦魚何の苦もなき水の泡 同
 月賦でもよいミ會社を信じきり 平塚府 小島大口坊
 スフで来て恥かしくない婦人會 同
 植木鉢妻干物へ口小言 同
 逝く秋の鏡鋭く光るもの 名古屋 鈴木可香
 さう向きをかへても止まる日の時計 同
 上役といふ不愉快な眼で見られ 同
 父親に似てるは賞めた顔でなし 今治 長野文庫
 結局は妻ゲンマリの戦法だ 同
 追剥ぎの出さうになつたハイキング 奈良縣 磯田 嶋田翠峯
 秋の虫蚊張に止つてスイツチョン 同
 令夫人兎角に筆で書き給ふ 松江 勝谷山川兒
 一錢銅貨の顔で女書記補 同
 乗り替へる私鐵菜の花今盛り 長野縣 上野原 林 幹

カンく帽又魁かけて得意がり 同
 御稜威への感謝この鍬軽い鍬 松本 小宮山雅登
 水打てば早や秋告ぐるしぶき舞ふ 同
 子の寝顔蠅一匹へくづされる 大阪 米谷松太樓
 重病ミ言はれ博士を信じる氣 同
 一鍬一荷二千六百年の土 尼崎 飯尾寄與史
 極道も母上様ミ書いてくる 同
 面らあてないがお肌がまたこわれ 下關 多田市多樓
 行水へ電燈のコード伸びたらす 同
 勝つたのが笑つてしまふ將棋盤 西宮 阿萬々の
 双方が泣いて終つた補回戦 同
 男廿五見返す人もあつてよし 大阪 片山鏡水
 子の武動母は此頃お茶を断ち 同
 ビール抜く音に簾垂れが騒ぐなり 布施 福井いづむ
 父ちやんの顔で會社の門を出る 同
 人生の縮圖三等待合所 大阪 富岡巨人
 手後れミ言つて博士の無表情 同
 弾けぬ妓は名所案内よくおほえ 長野縣 上田 佐二本千隈
 パチコンで損したこは言はぬもの 同
 本堂へ後姿を見せて行き 大阪 田中風葉
 信用は金か男か饒舌か 同
 かくれんほ空家の錠が怖くなり 尼崎 鈴木久仁子
 跡取ミして親類は大事がり 同
 事務服がのたりくミビルの晝 大阪 竹中アキラ
 あの荷物あの馬あの坂越すつもり 同
 國策か手鼻かんでる背廣服 尼崎 天羽鴨路
 夕立の上るを待つて蟬が鳴き 同
 四ッ角の蠟燭の火にのぞかされ 大阪 山下雪春
 親切がすぎて冷たい眼で見られ 同
 こ、までの一區バス嬢先へ降り 同
 電車ミ並行無駄なガソリン走つてる 同
 月並なお世辭へ娘赤くなり 同
 池田悠起



燈下に哄笑爆笑をおく著

新川柳評釋

麻生路郎著

本書は本誌に連載され名評釋として好評嘖々たりし「川柳評釋百句」及び「川柳名句評釋」の二篇を合纂したるもの、評釋の輕少さは日本柳壇に於ける著者の獨壇場である。敢て一本を薦む！

★四六版上質縞ラフ紙一四〇頁 定價 八〇錢 送費 六錢

滿洲・朝鮮・台灣・樺太其他外地 定價 八八錢

大阪市西成區玉出本通三ノ三六

發行所

不

朽

洞

振替 大阪三〇三九二

時事評を讀んで娘はみかへられ 同
退院へ母は嬉しく髪をすき 大阪 吉田ちる子
食慾のない子を思ふ蚊張を釣り 同
姑の愚痴にも馴れて子が育ち 神戸 丸尾美也子
子の寝顔矢張り慾はいらぬもの 同
國策へ古靴又も世に出され 大阪 小川京詩
我が子とも言はず千人針を乞ひ 同
英靈に涙新し砂利の音 廣島 大塚五厘棒
マラソンの汗拭く暇も無き選手 長崎 田中水哉
買上手ちやんご度胸をきめてゐる 名古屋 中西周鈴

寝行儀を吐つて母は蒲團着せ 大阪 山川富士
銃ベンにかへ傷兵の美詞麗句 同 山本葉光
状差をぶち明け住所探す秋 長野 織井公司
悪友の無い兄が有る窮屈さ 大阪 久保没子
夏祭何ぞ言つても夜のもの 廣島 西野旅人
大阪は草にも値段付いており 大阪 大西伊佐緒
レコードを聞く夕暮の窓にゐる 同 竹内春坊
寶塚誰かに逢へる氣もおこり 廣島 山路やよひ
いささかを貯金にいらてはつこする 今治 田窪石鐵
清燈へ兵舎は黒く浮いて見え 大阪 谷川曉香

ブラットの月へ重荷を忘れてる 下關 中村九呂平
打あけた結果が恐い片思ひ 大阪 多田一波
不成績遊ぶ根氣にちこあきれ 堺 野島神樂
出征旗母は少さくのび上り 大阪 先川千鶴子
軍事便おゝ生きこるご封を切り 台灣 松元正紀
黒眼鏡人想悪く見られて來 豊中 黒川渡矢子
何もかも女一人の罰となり 大阪 田中楠美
鳥燒きの味滿洲の香りする 滿洲 澤井香月
思ひ出し笑ひに秋がしのびより 大阪 中出木公

(近作柳樽都合で早く締切ました)



川柳塔

路郎選

黒部 峡谷

大 阪 橋 本 線 雨

山水の移り變りに眼は疲れ

白山新温泉

山の出湯に手を入れただけのこ
草刈りの手で鳴子一つ曳き

大 阪 奥 村 丹 路

キリストは答へず夏の日の互
親の嘘子の嘘樂しきかな親子
何を書くチエリーを蒼き指先に
靈魂の話さそれもよろしかろ
古風なる愛情さふさつばやきぬ

大 阪 高 橋 か ぼ ろ

應召へ人の氣配のせぬ社務所
お觸れ書に蠅がしまつてゐる残暑
實印のそうじしてゐる父を呼び

大 阪 水 谷 鮎 美

夏帽子虹がきれいな橋に立ち
頭をなで、子の通知簿を見る
子らの眼に冷えきる西瓜眞二つ
ひざり座るこゝがさびしい櫻ンほ

根 家 口 岩 崎 柳 路

最悪の場合には君よごうする氣
細い娘の白いねぶかに似てる指

通人が河豚にやられて死んださ

名古屋 吉田 水車

如才なく豆腐屋鍋をほめて去る

蠅一つ晝のお膳に落付けず

家根くく都會は空を忘れたり

大 阪 妹 尾 變 人

蠅た、き責を果して秋さなる

ほち／＼さ云ふ商賣は儲けて居

一さ盛拾錢あれかこれかさ眼の迷ひ

大 阪 須 崎 豆 秋

戦線へ見せてやりたい稻の花

金策に行けばバタ／＼大掃除

變人の第二放送ばかりかけ

修養さ思うてヂツミ電車待つ

明日も天氣か自轉車に油差す

みの虫のブラ下りしが池なりし

大 阪 後 藤 青 兒

マージャンへ響けさばかり喇叭の音
心齋橋の乞食は犬も飼つて居る
軍服の次次次さある日本

割前をそりやセツショヤミ断られ
父母は彼の稻妻の光る方
赤禱連れて歩けば敬はれ

○ 宮 岡 白 峯

飛びついて行く角もあり飛車もあり
アンペラへ思ひ返してゐる勇士
便箋を拜みつゝけてゐる勇士

眞四角な口で左へ右へ行く
太陽の眞下の飯へ兒の噂

松 本 石 曾 根 民 郎

友征く日知らず體温計にまかし
さりあえず父腸這ふた秋扇



柳展望

全國川柳界のこと各地川
柳人の一舉手一投足を此
展望欄ですくわかる様に
したい。皆様の御通信を
歓迎する。(係)

催

有恒俱樂部の有恒川柳會定例
句會は八月九日と八月二十三日
の夕刻より東區備後町野村ビル
の同俱樂部に於て開催された。
路郎主幹出席。
松坂俱樂部趣味道場の路郎主
幹擔當の川柳講座は八月七日と
八月二十一日の午後一時より開
講。
阪大川柳會は八月二十五日の
定例句會を阪大病院内惠濟會館
にて開催された。路郎主幹出席

消 息

和田默然人君(天津)は五日午
前十一時神戸出帆の北嶺丸で歸
津の途に就かれる事となつたの
で八月廿六日、再度木村半文錢
君の案内で本社を訪問され路郎
主幹と快談された。
白石紫薇花君(松江)は今回名
譽の應召を受けられ九月〇日、
〇〇部隊へ入隊された由。
竹内春坊君(川、雜港支部)は
今度名譽の應召を受けられ九月
二日令兄潮花君と本社を訪問さ
れ「元氣」派「かんぱり」派と
職はずして早や敵を呑むの氣概
を示された。
大森千代香君(廣島)は出征後
御病氣にかゝり〇〇陸軍病院に
て療養中の由。病狀も経過良好
との事一日も早く快癒せられん
事をお祈りする。
昭和川柳社(大阪)では九月廿
四日(念)榎原神宮建國奉仕隊へ
参加。意義ある柳翁忌と共に集
團動行を實行することとなつた
川、雜港支部より八月十五日
日開かれた石崎柳石君を迎へて
米雄、柳石、秋史、葉留路、麥
作、草雲子等。
畑田よし江君(大阪)より「川
柳も大分休んで居りました失禮

致して居ります。私是不相變女
中さんよろしく毎日忙しくして
居ります云々」とお元氣な由。
旅順川柳會(旅順)より三柳子
氏の高等官三等昇級を祝福して
の記念句會寄せがきを頂いた。
三柳子、月南、啞三味、新生、
世紀、杏南、榮丸、の諸君。
石崎柳石君(公治)は八月十一
日嚴島方面を旅行されて、本社
へ前田虹映畫伯を描く、宮島大鳥
居と鹿の美しい繪はがきを寄せ
られた。
濱田久米雄君(廣島)よりも偶
然、柳石氏と同じ如映畫伯の宮
島鳥居繪はがきを頂いた。出張
で山陰、長門、湯本温泉方面へ
川柳と共に旅行の由。
高鷲亞鈍君(大阪)は本誌一詩
人復眼の執筆で大好評である
が、今度新たに創刊される上
方廿世紀「文學」を執筆する者大
阪へ執筆された。同誌の表誌
はパステル畫界の先驅者矢崎千
壇二氏でその他執筆者は文壇畫
壇の大家連ばかりである。
川、雜港支部五周年記念句
會の寄せ書が着いた。曉童君の
句會最中文庫氏の二女出生の目
平尾、向上庵、石鐵、晴郎、の
諸君。
小西落丁君(三越川柳會)は八
月十八日故郷の御両親のお墓参
りにまゐられて、「故郷の風夜
汽車疲れの頬を撫で」の句を寄
せられた。
潮田明坊君(姫路)は九月一日
出張の爲大阪、本社へ立寄られ
路郎主幹と快談後直ちに歸郷さ
れた。
皆見一男君(大阪)は名譽の應
召を受けられ九月〇日午前七時
〇〇へ入隊された。
酒井斗風君(大阪)の弟さんが
九月〇日同じく名譽の應召を受
けられた。

今 治 鳥 生 古 弗
氣の迷ひだつたか郵便物の音
行きすぎてからの視線を背にうけ

大 阪 正 本 水 客
一人きて天井の高さ氣付くなり
靴穿いた素足女の國策か
診察室帯を結ぶに手間がいり
乳母車さんほが一つついてくる

中 黒 川 紫 香
街の灯へふたりの心折合はず
試運轉窓から顔が並んでる

大 阪 丸 尾 潮 花
くせのある字に見舞はれる夏を耐へ
反抗もなく青草の上に寝る
逢ふ場所ははて地下鉄か劇場か

大 阪 加 藤 ラ イ ト
アイスケーキ九月の恐さ言ひ聞かせ
桃山へやらぬ心算のヒマシ油
妻の名を呼んで夜中の戸をたき
雨突いてまで公休を遊びに出

大 阪 岩 橋 双 虎
曳く馬も汗馬子も汗アスファルト
信號の合間に盗むビルの窓

松 山 酒 井 大 樓

競演の形で勤勞奉仕班
國力戦の銃土たる氣の反古高
人生の迂余曲折の川に似る
堰かれたる水奔出の隙ねらふ
心臓の強さも私情へは脆く

愛 媛 縣 大 洲 今 川 椽 影
お手拭へ女は手だけ拭いてすみ

無料サービス湯呑はつかへてる
起重機を使ふ人間様の智慧

今 治 渡 邊 曉 童

車窓はるか譽の家の國旗かや
通過驛氣笛一聲残しき
旅の驛此處も兵隊さんが出る
母の意見の搦手を衝き
人形の手の表情は淋しいね

沿線に寺あり爽竹桃咲けり
君訪へば君はミシンの前に無く

長 野 縣 湯 田 中 金 井 有 爲 郎

盆燈籠佛様が來てゆする風
支那へ行く馬かあまりに澄んだ眼だ
馬征つて夜は音なき一軒家

〇 植 山 九 天

慰問品中味をあてる髭が寄り
「戦跡保存」〇〇部隊〇部隊

三勇士廟江鎮は草いきれ
寢台にもぐれば故郷のこゝにふれ
燈下管制戦車は馴れた音でゆく

廣 島 濱 田 久 米 雄

乗り遅れたした團體の騒ぎやう
一つづ、湯の街の灯が消えて行く
一人旅隣が寝むから寝み

高 知 中 澤 濁 水

敵弾はボケツの母に與へられ
先づ逃げてくるりくるりさ撃ち墜し
空爆に四百餘洲は狭くなり
境内は國婦で雪の降つたやう

まだ一度會へる師團へ兒を背負ひ

▼西尾栗君(大阪府)より櫻島も夏休みで噴火を休んでゐます云々の旅便り繪はがきを頂いた。
▼周魚、鞍馬、しげを、〇丸、三太郎、五花村、黙然人、大郎丸の諸氏より寄せ書を頂戴した。
▼佐々木三福君(大連)は社用に東京へ行かれた。そのお便りの中に「近來の北京の日本化は素晴らしきものにて一寸横町に入るとうなぎ屋があると云つた有様に候」云々とあつた。
▼小林不浪人君(青森)は全國川柳大會閉會後有志連で山の湯杖留温泉へ行かれた由。不浪人、よし丸、哲男、曉昭、甚六、車山、三太郎、勇魚、昭二、紫蜂の諸君より寄せ書が着いた。

轉 居

▼片山鏡水君は此花區十六町二六中川菊松方へ▼岡田某人君は大坂市東成區大今里四三二へ▼稻垣正徳君は名古屋市中川區野立町七畝割二四一六(區名改稱)

正 誤

▼前號十七頁川・協欄寫眞説明小寺早太氏は小寺融吉氏の間違▼前號八頁「それぞれに朝顔を出す島の内」は「出す」の誤。

社 告

▼川・雜岡町支部(大阪)は會員激増と會員の地理的關係から句會の開催及支部の事務上に尠ず不便の點があつたので、今回支部を便宜上二分し同時に支部名義を左の如く改稱、幹事を一名増員することゝなつた。
北大阪支部(幹事 黒川紫香) 港支部(幹事 丸尾潮花)

「藏書票紹介」連載中執筆者

佐藤米次郎、中田一男、前川千帆、西田武雄、小林朝治、料治朝、關野準一郎、武藤完一、小塚省治、棟方志功、川上澄生諸氏

川柳しなのの 十五銭

「研究、隨筆」執筆者
尾崎久彌、齋藤昌三、本山桂川、鈴木重光、梅本秋農、屋、袋未知庵、花岡百樹、食滿南北、松川弘太郎、桃源堂主人諸氏

川 雜 案 内

大體漢字十四字三行
金五十銭(一行増す
とに金十銭(但し前金
切手代用可)但し前金
改號、移轉、句會案内
柳廣告、その他

川柳を作る人愛好する人の必讀誌
毎月一日發行 一部廿銭 送料一銭
東京牛込區揚場町八川柳俱樂部社

川柳俱樂部

東海の 川柳草薙
代表誌 一部一〇銭(一年一圓(郵税共)
名古屋市南區八熊町寺田
發行所 草薙川柳社

川柳きやり

菊判每號七十數頁
毎月一日發行 一部廿五銭
東京豊島區高田本町二ノ一四
六八 川柳きやり吟社

京 一部十銭 一年一圓
京都市西木屋町四條下ル
發行所 京都川柳社

月刊 川柳みちのく
一部十五銭 一年一圓五十銭
青森縣黒石町 川柳みちのく社

三 味 線 草
一部廿銭 一年 二 圓
大阪市此花區西九條二ノ六二
大阪、媛柳 川 柳 社

「大正川柳」第五一號及び第五
八號相當の代價にて譲受けたし
川柳雜誌社内 B B 生

懸賞川柳

課題「身嗜み」十月十日
「油」十一月十日
用紙は官製ハガキ(化粧柳壇と
明記の事)選者藤生路郎氏
秀逸數句に薄謝を呈す
宛先 大阪市西成區玉出本通
三ノ三六 藤生路郎氏方
化粧新聞社柳壇へ

協★川

★讀賣新聞の南信版に「英靈に捧ぐ句友の誠、信濃文藝界の佳話」と題して松本市大名町の石曾根民郎君(川協評議員、川維不朽洞會員)の美擧が掲げられた。これは去る○月○日北支戦線で名譽の戦死した○部隊付、長野市出身横川由司歩兵伍長の戦死を知つた句友石曾根君が直ちに同好の士に呼びかけて横川君が戦死十日前同君に送つて来た今は最後の句となつた「夜行軍畫のつか

根君の談話や、今は亡き曲豊君の母堂たのさんの談話を掲げられてゐる。柳壇近ごろの佳話である。

田黙然人君と共に出迎へられることになつてゐる。麻生理事長と岩崎柳路君とは柳界稀に見る美しい師弟關係にあるので、北支黨に川柳を發展させるのはこれ位、機會はないと思ふ。

★九月十八日に本協會の麻生理事長が、北支、蒙疆方面へ旅行されることになつた。

張家口の岩崎柳路君は天津の和

★森東魚氏が病臥、肺炎になるおそれがあるとの報に接しひそかに案じてゐる。熱は四十度を越してゐる。快癒を祈る。



大坂市西區... 錦屋

川柳忌

(主催 川柳雜誌社)



戦死柳友慰靈祭

(主催 川柳人協會)

★柳祖の偉業を追慕するため年中行事の一つとして例年の如く川柳忌句會を開催いたします。

★なほ事變勃發後、聖戦に参加され無言の凱旋された柳友の戦死慰靈祭を併せて修しますから(焼香並びに讀經少時)一人でも多く御出席下さいませ願ひいたします。

九月 21日 兼題「命日」三句 高橋かほる選

夜六時半 會費 三〇銭 柳話 (題未定) 西田 艸 樂氏

誓得寺(電南四八八六) 大阪市電清水町停留所一丁北ノ辻西入

乞鉛筆持參

川柳人協會 雜誌社

大坂市西區筑前ばし電停前 昭和ビル 電話土佐堀三三三三・八一六三・八一六四番 潮花・ライト・紫香・水客・變人・鮎美 幹事

此際 長野文庫



僕は永年に亘つて煙草を嗜んで来た。或る時期に於ては、毎日十本入の兩切煙草を三箱位宛煙にした事もあつた。最も量の少なくなつた時でも、一箱を缺かした事はなかつた。その爲かどうかは知らぬが、皮膚に生色がなく、顔もシナべて、始終胃腸が弱く閉口して居たが、それでも尙意志が弱く止める事も出来ず悪い悪いと思ひ乍ら、本年まで續いたのであつた。ところが昨夏勃發した支那事變は遂に僕のこの永年に亘る吸煙をアツツリ断ち切つた。

水族館 麻生 葎乃

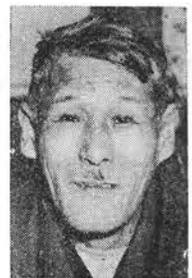
空が水色になつて暮れて来た。

ルービヒサア

社會式株酒麦本日大

それに就て思ふのは、如何に平素生活の改善とか改革とか云つて見たところ長い年月の隋性云ふものは容易に改まるものではない、何か重大な事柄に直面せねば、餘程の衝撃をうけねば、駄目らしいと云ふ事である。斯うした機會がなければ物の改革と云ふ事は中々行ひ難いものであつて、若し終生これに出合はなかつたら終生同じ状態であつたらう。

窓の外にも水色が流れてゐる。水色の中を電車がゆく。自轉車が走る。何とせはしない水族館であります。大學を出たので學士様車屋へ生れたので車屋さんどちらも矢張り、二つの眼と二本の手を持つてゐましたが、マガホンを手片手に物凄く聲で叱つてゐる。のは交通巡査に自轉車を片手に氣まきり悪るさうに立つてゐるの。彼氏。どちらが正か邪かそれは空氣にお尋ねなさい。



久良良 俊翁

古稀の慶び

ブルーブル 婦人背廣服當選者

稲垣正穂氏を訪ふ

日本柳壇の耆宿坂井久良良俊翁(川柳人協會名譽會員)が齡ひ古稀に達しられたので本協會では御承知の如く本年三月から八月末まで半歳に亘つて古稀祝賀記念品贈呈資金を應募いたしました。

全國各地多數柳人の御賛同により下記の通り二百八十四口の御醸金がありました。醸金された各位へ、右御報告申上げるご同時に御厚志を深謝いたします。

★記念品贈呈に就いて

で少しく遅延することを御含み願ひます。

贈呈者芳名

- 五口 藤本 蘭花 君(京都)
- 五口 大窪 文芳 君(名古屋)
- 五口 小林 不浪 人 君(青森)
- 二口 馬渡 金佛 君(東京)
- 二口 高峰 柳兒 君(長野)
- 二口 山本 葉光 君(大阪)
- 三口 川・維鶴町支部 殿(同)
- 五口 川・維天王寺支部 殿(同)
- 小計 三十二口 計二百八十四口



近頃ワレタ場合に役だたぬニセモノをサン硝子として販賣する店が有ますから御買求の節は是非SUN金文字入真正品と御指定下さい。

有全國時計店・百貨店
大阪日本橋五 小西光澤堂本店

急告!!

「路郎主幹の印象は」と極めて返事のし難い質問を投じると「これは内緒ですけどネッけんこつ々の味ですね」との事、拳骨なんて穩かならずと更に「げんこつとは……」と反問したら「大阪では何と云ひますか……名古屋ではげんこつと云う、豆の粉を堅めて造る菓子があるんで

★北支・蒙疆・大連方面の川柳人各位へ

来る十八日午前九時大阪驛出發——正午神戸出帆の黒龍丸で北支・蒙疆へ川柳行脚並びに文化視察のため旅途に上ることになりました。二十一日午前九時大連着、同十一時北京丸で天津に向ひます。行程は未詳ですが歸途大連を訪問する豫定であります。一々御挨拶状を差上げるのが本意でありますが出發前の多忙でその意を得ませぬ。茲に誌上を藉り御挨拶に代へる次第であります。

川柳人協會理事長
川柳雜誌社主幹

麻生路郎

Sata Special Klinik

呼吸器病科

診療 午前 午後

醫學博士 佐多愛彦 北8

醫學博士 加藤謙一 北8

醫學博士 螺良四郎 北8

電話 1151

市電堂島町停留所北邊

佐多醫院

大阪堂島北 電話 八二四八

各地柳壇

規清稿設

一、用紙は原稿用紙又は投句箋の事
 二、文字を正確明瞭に記載のこと
 三、開催月日及場所記入のこと
 四、締切は毎月廿五日とす
 五、投稿先は本社宛

梅田支部句會 (大阪)

和歌浦吟行

七月二十九日 原 紀三報

貝細工あの兒この子の顔がうき 紀三
 トンネルも涼し旅館からも風 鮎美

虎の繪が猫にも見えて朗らかさ 秀峰
 虎の首あるかなしかの風にゆれ 同
 日曜の日出へ虎も鬣をする 同
 サークスの虎へ少女の身の軽さ 鮎美
 寫生する虎は眠つてばかりゐる 同

川 岡町支部句會 (大阪)

七月八日 於 野本呑水居

丸尾潮花報

新婿、値上げ、片思ひ

標札の文字がうれしい新世帯 芳 醉
 新婿へエプロンのゴムきついなり 水 女
 新婿の當座妹じやまにされ 波矢子
 新婿の當座驛まで迎へに来 雀 草
 新婿の疊も新らのとこへ住み 風 葉
 留守の間を女帯なぞさわつて見 綱五郎
 非常時の覺悟は出来る新婦なり 呑 水
 新妻の足袋の白さも嬉しくて 水 容

新婚を問へば二人で迎へに出
 新婚へ妻は嬉しくお茶を立て
 古靴を出して値上の話なり
 片思ひ紅提灯の灯もさみし
 夕焼をそのまゝ見てる片思ひ
 片思ひ秋のまひるの小石ける
 紫香 潮花 秋雪 雪春 ふみ子 ひさみ

川 今治支部句會 (今治)

八月十五日 於 東洋文庫書店

渡邊曉童報

母、雜誌、素人、職人、貯金

朝顔を竹ごと抜いた秋の風 向上庵
 天高し米屋のツケが増えてゐる 同
 素人の汗をふきく渉らず 曉童
 素人の釘を拾銭ばかり買ひ 同
 羽織着て寄ると職人静かなり 同
 貯金帖あはれ名残の五拾銭 同
 素人と言はれぬ腕を使はれる 一風
 國策へ斷じて出さぬ貯金帖 向上庵
 喰ひついて見たい頬なり吾が子なり 石丸
 算盤のいらぬ淋びしき賣上よ 同
 職人のカンナイつまで研ぐつもり 同
 戀人ですと言ふ職人の腕 同
 貯金箱パットの釣も入れて置き 平尾
 長男が出来て貯金がしたくなり 同
 欺されたのを數日後知る素人 石鐵
 職人は明日の分も少し呑み 文庫
 金の事云へば職入ムツとする 同
 職人の勘寸法にビタリ合ひ 同
 下手ながら母の手紙の胸を打つ 同
 警戒をするほど金は持つてゐる 曉童

有恒川柳會 (大阪)

七月十九日 寺井鏡々報

バス、客齋、雜吟、相談

素人の考へだよとあしらはれ 石鐵
 貯金く小學校のが少しあり 同
 乗降りに傘が重なる雨のバス 鏡々
 終點のバスへ柳がちと淋し 同
 バス降りて湯屋を曲つた所に住み 同
 遊覧バス景色景色へ首を向け 同
 颯爽と國を出た娘がバスに居り 同
 バスガール家族が乗つて少しレ 同
 通勤のバス又あの人が乗つてゐる 乃武路
 驛前に淋しくバスが置いてあり 同
 田舎では車二台でバス事業 同
 バスが来ておらが在所日に開け 同
 ガソリン節約と電車でもつて来る 同
 區間切れバスは入庫の様に空き 同
 國策に重役バスを愛用し 同
 相すまぬ氣のする自分だけのバス 波夢造
 意地をこバス待つ午後の汗を拭く 同
 バスと瓦斯出来さうにない賣出地 同
 チツプなどやらねばケチが知れぬ 同
 あいつなら三途の渡し値切るだろ 同
 客齋だと蔭口されて舊家なり 同
 客齋も詮じ詰むれば藝のうち 乃武路
 節約論フ、ンとあしらふ彼氏なり 跳二
 けちんぼのくせに大きな家に住み 雨月
 寄附帳が客齋の噂を証據立て 平三
 タキシードをビアナも叩ける手 波夢造
 寄附金を断るにビアナ邪麗になり 鏡々
 アパートの雨朝からザアキオリン 同
 (經濟研究會敦賀港視察)
 品行方正にして浪靜かなり 雨月
 旅の恥掻き損つて獨り寝る 同
 港の夜何處からとなくポツポツポツ 同
 夙く起きて松原公園へ笠の段 同
 古城史を説く神官の眞面目さよ 同

日本海一と跨ぎなり敦賀映ゆ 同
 溶けて来た土産車中に持てあまし 波夢造
 出来る相談致しませうと上手也 同
 片隅の相談ろくな事でないし 同
 兎も角も親類がよつて兎をつけ 同
 相談の聲の落ちたは金の事 同
 相談會あとから来たが茶々を入れ 同
 いづれ御相談に上りますとバスの中 同
 呼び止めて呑む相談は面白し 同
 身に覚えあつて相談引受けし 錦浦
 御相談と尤もらしく無心なり 跳二
 相談の相手に小さい坊を抱き 雨月
 相談會女話しに花が咲き 波浪
 相談は最後の五分だけで済み 平三
 相談へビール位は出す氣也 路郎
 下相談をしてゐたことを續にさへ 同
 金ですむ相談かいと母家いふ 同

浴衣、眼鏡、雜吟

七月二十六日

夕涼みスフの浴衣を見せ歩き 波夢造
 涼み台派手な浴衣は舞はされる 同
 避難民らしく浴衣も目立たない 同
 水難に遭つたとも見えぬ浴衣がけ 雨月
 浴衣掛誘出されて灯を歩き 鏡々
 流行の登山母親苦勞ふえ 同
 落伍には一層醜い登山服 波夢造
 水害へハイキング黨引出され 雨月
 一碧の空登山笠うち並び 鏡々
 水禍所感
 二天作の七と河川は汎濫し 雨月
 釜日會嵐山行 同
 明日に備へて茶人の心構見せ 同
 蟻蟻一の鳥居平の家 同
 鮎の骨抜けた抜けぬと男同士 鏡々
 鮎とたど涼しさで来る茶店あり 同
 はなメガネかゝると言ふが自慢なり 雨月
 女房に眼鏡があつてマ、であり 同
 金ぶちをはげせば只の男なり 同

親父のまゝ間にあつたのは眼鏡だけ
湖の景へ朝起きたる眼鏡拭く
黒眼鏡策あるやうな黙笑し
縫物に老父の眼鏡一寸借り
挨拶の女優紫の色眼鏡
叱りつゝ眼鏡のほこりふいてゐる
かくされぬ眼鏡の奥の一斑
藝の無い妓眼鏡を拭きたがり
先づ最初手の皺を見る虫眼鏡
老眼鏡家賃の通ひだけに見える
つけを見るだけの眼鏡となりにけり
色眼鏡嫌はれたとは知らぬ也
眼鏡拭く人へ道具屋腰低し

雨ゴト蛇の目の傘で動に出
蛇の目傘千人針の順を待ち
手摺からの聲へ蛇の目は笑ふだけ
蛇の目傘驛まで歩く連れになり
假橋をあぶなく渡る蛇の目傘
蛇の目傘道頓堀は灯がともり
蛇の目傘お風呂の前で別れて来
母親はいゝなと思ふ夜がつづき
土くさい姿で母は迎へに出
發車ベルふと母親の目がうるみ
母はまだ若く化粧へ手間がとれ
母親のすべてを子供信じきり

雑川 大鐵局支部句會 (大阪)

あくび、風呂、長男、桃割

あくびして出る手へ書留届けられ
人生へ早や欠伸する赤ん坊
長男はひよろ／＼と世に活きる
長男は堅い會社へ勤めさせ
傳來の家で長男病み續け
心臓の弱いのがゐる男風呂
女湯のれんきはどく揺れてゐる
風呂の蓋鼠の落ちた蒸暑さ
桃割も五錢喫茶と云ふ姿
桃割のふと行く先がこはくになり
桃割が闇に浮んだ遠花火

天井裏鼠に廣き場所ならん
天井でもう行き所の無い煙
天井の隅でランプの忘れられ
天井も見あいて病はかどらず
テールを叩いて主張強いとす
どん底の暮しへ子供笑はせる
底抜けの騒ぎへ刑事さぐり入れ
どん底へ女房の聲が突るなり
どん底の我が奇蹟もなかりけり
闇の底から湧いた女の笑ひかけ

雑川 あざみ句會 (大阪)

池田悠起報

夜の道、母、蛇の目傘
夜の道男とわかる煙草の灯
曲馬園夜道をかけて行く峠
夜の道ふたりは急ぐとも見え
集金の歸り夜道となるこわさ
夜の道つめたくのびた影を踏む
蛇の目傘ふたりで歩くだけでよし

夕立は隣村まで来たばかり
夕立へ今度は妻の傘を借し
あの峰はもう晴れてゐる通り雨
玄關で迎へる妻を想像し
玄關でおぼちやんと云ふ隣の子
六感で居留守を使ふ玄關子
玄關子先づなり見ての出様なり
玄關へ自分の靴のみすばらし

雑川 竹原支部句會 (廣島)

五月廿八日 於 松井可笑居
天 井 松井可笑報

六月十九日 於 梶川芳郎
出征へせめて坊やに旗振らす
千人縫兄の征途も間近です
出征兵士を送りて
万才に押される様に汽車動き
出征の意氣すでに敵を呑む
野良の手を擧げて征途へ力付け
最後かも知れない故國遠くなり

雑川 廣島支部句會 (廣島)

石崎柳石氏を迎へて
八月十五日 於 長谷川秋史居
濱田久米雄報

代用品、夏の宵、浮く、
牛乳、舗道、錠
代用品見本のやうに竝べられ
代用品代用品銃後の意氣上る
代用品時代細かく氣を配り
代用品こゝまで氣づく母であり
窮すれば通ず代用品時代
夏の宵ゆつくり涼むつもりで出
夕風へしばし風鈴音もなし
夏の宵女給は涼みながら待ち
涼台寝た子をそとと抱いて立ち
蚊いぶしへ將棋がつづく夏の宵
組板の音家中へ夏の宵
夏の宵寝られぬまゝを讀みつけ
夏の宵いゝ風だぜと橋の上
ダイビング案外早く浮いて出る
牛乳をのんでどうにか夏を越し
出前持舗道に馴れた高足駄
馬の汗舗道まだく焼ける氣か
バス待つ間舗道蹴つてるハイヒール
夏の宵錠前もせぬ散歩なり
個人主義錠も財布の中にある
錠の位置教へて女房留守にする
倦怠期錠をせぬ日がつづくなり
錠前をはずすと犬は伸びて出る

雑川 松江支部句會 (松江)

八月十四日 於 なにわ旅館
勝谷山川兒報

扇、港、唇、飛行機、召集
扇子パチ／＼迎合主義者何か云ふ
繪團扇の嫁いだひとに似た顔よ
扇子にて候代理にて候
團扇から夏がこぼれた
船頭の聲から港夜があける
港の灯裸の銀貨二三十
船員のはしやぎ港が近くなり
見送りを終へた港は霧となる
港は浮氣風の鷓鴣よ
搜索船朝の港へ戻りたり
故郷が戀しい港の雨となり
港の灯安いきつスは何處かいな
唇を盗まれさうに塗つてゐる
無言の唇や鬨志満々
唇は赤くボンボンディアかな
飛行機の國境線の雲に乗り
萬歳の頭上飛行機舞ふてゐる
飛行機にしばしとぎれた田植歌
飛行機を淋しく仰ぐ松葉杖
召集令不孝の罪はゆるされる
召集の父に無心な子の寢息
赤紙が一家の心ひきしめる
召集へ父となる日も待たず征く
召集へ心ばかりの酒を酌む
召集令父は日露の勇士なり
やせたからだで召集まつてゐる

松坂俱樂部句抄

屋上、袖、男手

望遠鏡据えて屋上月を待ち
夕焼けの色を屋上うれしがり
我が家の方を屋上から訊ね
屋上のこゝも日の丸掲げたり

屋上の散歩主治醫に勧められ
 屋上のベンチ看護婦何か讀み
 飛び降りて眞似て屋上しかられる
 物思ふ子が屋上に竹んで
 大體の見物は屋上からすまし
 屋上と食堂丈けが主な用
 屋上のほかに廣場をもたぬ子等
 占領だ！どの屋上も日章旗
 屋上の社もそのまゝ賣られ行く
 屋上に鉢等並べ老使丁
 袖丈が丁度丁度と借り羽織
 生活の疲れを袖の皺に見せ
 袖なしが似ようて母もふけてゆき
 袖だけがいのち手古舞の緋縮緬
 蚊とんぼの様なが先きに袖まくり
 吊革へ嗜しなみのある袖を持ち
 ストップへ袖をひかれて立ちどまり
 袖ひいて女が覗く飾窓
 片袖にかけて新柄見つめられ
 エプロンの袖だけ見ればたのもし
 桃鬪は泣くも笑ふも袖ですよ
 ワイヤットの袖ちぎりたい午後三時
 時代は巡り元緑袖がもて
 袖で打つまね踊りの振りになり
 母親になつて振袖もてあまし
 心にも無い袖にしたがとくやしがり
 袖屏風それは昔の夢なのさ
 男手がなく演習は寄附で済み
 男手の世帯に赤い裂れがない
 男手のないへ男手寄つて来る
 男手に育つて婚期遅れさう
 男手を借りてトランク網棚へ
 男手をかりたる帯のメ心地
 そもくは男手かりたが縁のはし
 男手を出す茶いでも不足きく
 男手は陣痛の呻ききくばかり
 病み込んだ女房に男手の粥の味
 生白いこの男手の行き所

見送つて男手無しの大掃除 三華
 男手が出来て母娘に異常出来 同
 男手が無く防空演習へ寄附 耕二
 男手がないばかりに釘もうち 路郎
 よいとこへ来た男手へ冷蔵庫 同
 男手といはれて瘦せた腕を見る 同

川 下關支部句會 (下關) 多田市多樓報
 月見、ビール、團扇、雑、戦線より
 電燈を消して月ある様に出る イロハ
 寂寥と噴水見ゆる月の庭 永川
 雲も木もなく月見は詠めざりき 半休
 夕月へ虫も一役名コンビ 比呂志
 もうこんな人出になつた月の原 九呂平
 ふと見れば今宵の月は走つて 山尾
 傷ついた心にビール苦いなり 愛泉
 積日の怨みビールに訴たへる 同
 榮轉の友とビールで呑み別れ 永川
 おさまつた泡へビールを注ぎをへる 少坊
 二次會はビール一本だけと云ひ 永川
 妻の不在ビール飲んだと子は告げる 春美
 藥屋の團扇藥の名が並び 九呂平
 濫團扇去年の骨が丈夫なり 山尾
 破れてはるれども用のある團扇 市多樓
 閉人の無聊團扇を眺めてゐる 比呂志
 團扇が語り合つてる涼み台 勇幸
 添寢する團扇は重た相に揺れ 九呂平
 國策と云ふので貧に克つてゐる 愛泉
 日光で三百年の夢を聴く 流泉
 お隣りはすき焼らしい話し聲 少坊
 もうこれが秋と云ふのか虫の聲 市多樓
 兵隊になる來年の歳を待ち 同
 控へ目にすれば元氣がないと云ふ 山尾
 里へ行く女房白粉買つて來た 同

草の實をかじりつゝ撃突を待ち 千代香

未だ生きてゐるぞなどと笑ひ合ひ 同
 お手柄と髭の長さも書そへて 同

阪大川柳句會 (大阪) 丸島利生 報
 マニキュアお米の値段知りもせ 利生
 マニキュアやがて襪襪も洗ふなり 同
 わが脊子が來る宵もマニキュア 同
 苦勞とお手を思ふマニキュア師 君女
 マニキュアの指で一針縫う行き 方正
 遊情をば誇るに似てマニキュア 柳秀
 マニキュア働指と思はれず たけを
 國策はどうであらうマニキュア 青一路
 マニキュアも知らぬ女房は老けて行き 春巢
 マニキュアのバリに居つて云ひ 春巢
 マニキュアに爪はぶかし年より 香附子
 錠盤に走るよ紅の爪と爪 利生
 マニキュアの指で郵貯も下り行き 栗二
 マニキュアつぶつた眼から娘も 浩二
 蕪口の隅で切手が黒うなり 栗二
 落手切手這入つてた事も云ひ 同
 くどくと書いて母親二枚はり 路生
 切手代借りて履歴を送つとき 同
 ぢの藥切手を入れて註文し 同
 郵税の不足へ妻はにがりきり 利生
 慰問品切手の方が高くつき 浩二
 軍事便切手落したやうに見え 君女
 律義者切手の借りが忘れられず 春巢
 切手まで持たせて母は旅立たせ 筑川
 切手はつて仕舞ふた元氣で投函す 栗二
 切手なめる舌の長さを見つめられ 春巢
 脊柱カリエスにて娘を失へる學友へ 柳秀
 宿命とさとれど窓に立つ姿 利生
 成角は彦左のやうに睨んでる 同

ダイビング拍手がすんだ頃に浮き 春巢
 ショート、ゴロ掬ひきり手は長し 路生
 伊達巻の後姿へ湖は暮れ 栗二
 つぎつぎと寝顔のぞいて俺の子だ 同
 我に似て後へは引かぬ香車なり 利生
 藥局で待てば隣の人と逢ひ 六けを
 藥劑師にやつと上げた未亡人 栗二
 陳列の劇薬中味抜かれてゐる 方正
 藥局で貰ふて飲めとなかは逃げ 同
 豫防ゴムなど藥局賣つて居り 同
 ビリン位は女房調合し 路生
 調劑を見てもと藥効かぬやう 同
 効きさうな音で藥が出来上り 同
 藥局も手傳ふ嫁が醫者へ来る 同
 藥局生醫藥分業をくどく説き 柳秀
 藥局をのぞけば天研さびてあり 同
 看護婦に藥局まかすたよりなき 同
 醫局も母赤赤酒の處方を出さ 同
 恥しい藥、オチヨヤン買ひにゆき 同
 藥局は妻と娘に委しとき 同
 藥局は手もりの藥賣りつける 同
 藥局のウインド豫防具もならべ 同
 開局へサツク白粉みな揃へ 同
 藥劑師店員になり醫者になり 同
 氷囊一つで藥局起される 同
 藥局で聞けば何でもない病氣 栗二
 苦味丁幾やろと患者まけてゐる 同
 さしかけた暮をおいて立つ藥劑師 同
 藥局は迷へる心見のがさず 同
 水道の音で調劑終りたり 同
 開局は養子娘と知られたり 同
 藥局を出て王突へ寄つてゆく 同
 間に合はぬ藥局から貰ひ 同
 飛車が成つて藥局立ち上り 同
 藥局はもう助からぬことも知り 同
 藥局は水もはかつて賣るところ 同

にきびとりに

美^び顏^が水^す



ニキビ

美容薬として

ニキビ吹出物に非常によく効きますので大評判の薬です。ぜひお励めしたい薬！

この薬は美容薬としても大へんよく入浴後や洗面後等にお用ひになるととても爽快で、ニキビ吹出物を防ぐのは勿論、キメが細かにツヤを増しお顔がスツキリと美しくなるので美容薬としても盛んに愛用せられてゐます。

蚤蚊南京虫其他毒虫でカユイ時にもとても便利な薬！

吹	に	此
出	ぜ	薬
物	ヒ	を

化粧用 美顏水

ア	粧	の
ラ	下	お
顏	に	化

最適 !